連載：現代管情報シリーズ

中国・曙光電子創業50周年記念の新製品「珍品」シリーズ 完結編

Part-6

CV181-Z（後編）

都来往人

はじめに

慌てるとろくなことはないものです．先月号の原稿をほぼ書き上げてイラストに着手しようとしたところで，予期せぬ不慮のトラブルによって原稿のデータ・ファイルを失ってしまう事態に陥りました．運の悪いことにバック・アップをとっていなかったため，締め切り間際で一からやり直す羽目になってしまいました．記憶を頼りに突貫工事で何とか1号分の分量は用意できたものの，チェックが不十分だったため，いつにも増して誤字が目立つほか，文末には予定のなかった意味不明の次号予告までつけてしまいました．見苦しいものをお見せしてしてしまい，誠にお恥ずかしい限りです．失礼しました（反省）．

先月号では，珍品シリーズ（=Shuguang Treasures series）唯一の電圧増幅管であるCV 181-Zの構造的特徴や電気的特徴をご紹介しましたが，今月号は試聴結果のご報告からになります．

試聴結果

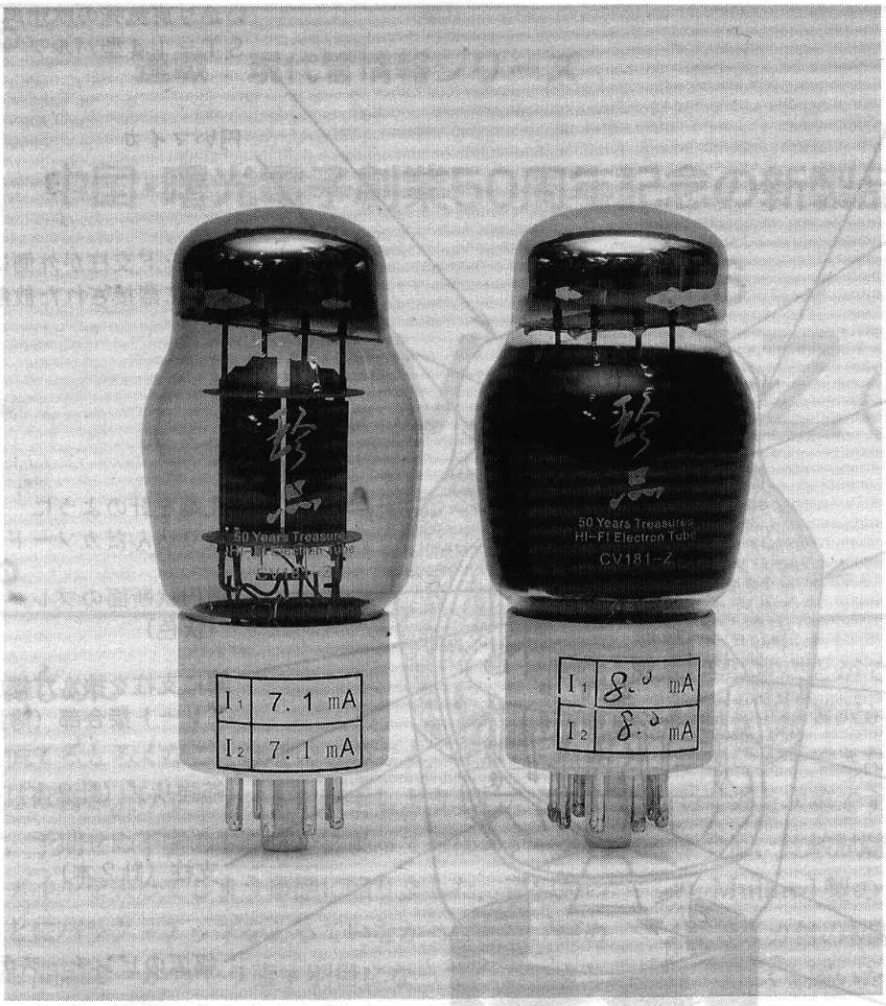
さて，肝腎の音質は自作のドライバー・アンプでテストすることにしました．これは出力管だけで構成した単段のトランス結合パワー・アンプ（入力は8Ω受け）を駆動するために昔に作った実験機です．増幅段はWE-310 A（3結）にCV 181/ECC 32（SRPP）の構成で，出力を5KΩ：8Ωのマッチング・トランス（旧TANGO：MT-3）で送り出し，整流管はGZ 32もしくはSTC-5 R 4 GY/CV 717という内容です．小出力ですがこれ単体でも実用上満足できる音量でスピーカを鳴らすことができます．WE-310 AとCV 181の組み合わせは贅沢かもしれませんが，当時はまだ比較的手頃に入手できたの，で出てくる音に興味があって試してみた次第です．

今回，比較試聴用に用意したサンプルは，オリジナルMullard製のCV 181は黒ベースを履いたサイド・マイカ付の初期型（Type-1 A：1940年代後半製）と，茶ベースを履いたサイド・マイカ無しの後期型（Type-2 B：1950年代後半製）を，現代管は中国製6SN 7 GTとして知られる6N8Pの現行管（Type-2）と，その原型である旧ソ連製6H8C（Sovtek-6SN 7 GT）の他，CV 181-ZはType-1（青バルブ）とType-2（カーボン・スート）の計6種類です．

まず，リファレンスとして最初に試聴したオリジナルCV 181の初期型（Type-1 A）は，一聴してクリアで瑞々しく，明るくて温かいのが特徴です．

なめらかで柔らかく，押し出しが良くて，パワフルかつダイナミックなその音は，どちらかと言うとややナロー気味ですが，聴感上のダイナミック・レンジは結構広くて，粒立ちも良く，ホール感や奥行き感，ステレオ感も十分にあります．余計な付帯音が削ぎ落とされた感じですが，響きや余韻は適度にあります．高域まで素直に伸びており，低域は豊かで締まりがよく，中域は充実しています．音の芯は中域にあって，バランスは良好です．

さらに，この球の最大の特徴は肉感的で浸透力が強いことです．ヴォーカルはしっとり濡れて艶かしく，弦楽器や管楽器は艶やかでより魅力的に聴こえます．クリーミィでリッチなその音には同じ英国生まれの



●珍品 CV 181-Z（Ttpe-1）青バルブ　●珍品 CV 181-Z（Ttpe-2）クリア・ガラス/カーボン・スート

中国製の真空管は音がイマイチ良くないという印象をお持ちの方は結構多いのではないかと思いますが，私の個人的な経験では，電圧増幅管も出力管も点火直後とヒート・アップ後とではその印象がガラリと変わります．

点火直後は寝ぼけていてダンゴ感がかなりありますが，完全に温まると，それまで奥につかえていたものがほぐれてこなれてきて実力を発揮するようになるので，正当な評価は点火後しばらく経ってからでないと難しいというのが実感です．

ヒート・アップすると数段グレードが上がるので，最初からダメ出しをするのは性急で，使い方にはちょっとしたコツがあるように思います．このヒート・アップに要する時間は長いように見えるかもしれませんが，使い込むほどに（すなわちエージングが進行するほどに）短くなってゆくので，しばらく我慢して気長に使い込んでいくと次第に味わいが深まっていくのを実感できるかと思います．

は，一聴してクリアで明るい音です．高域までよく伸びていて，細かな音までしっかりと聴こえますが，点火直後とヒート・アップ後とでは印象が相当変わります．

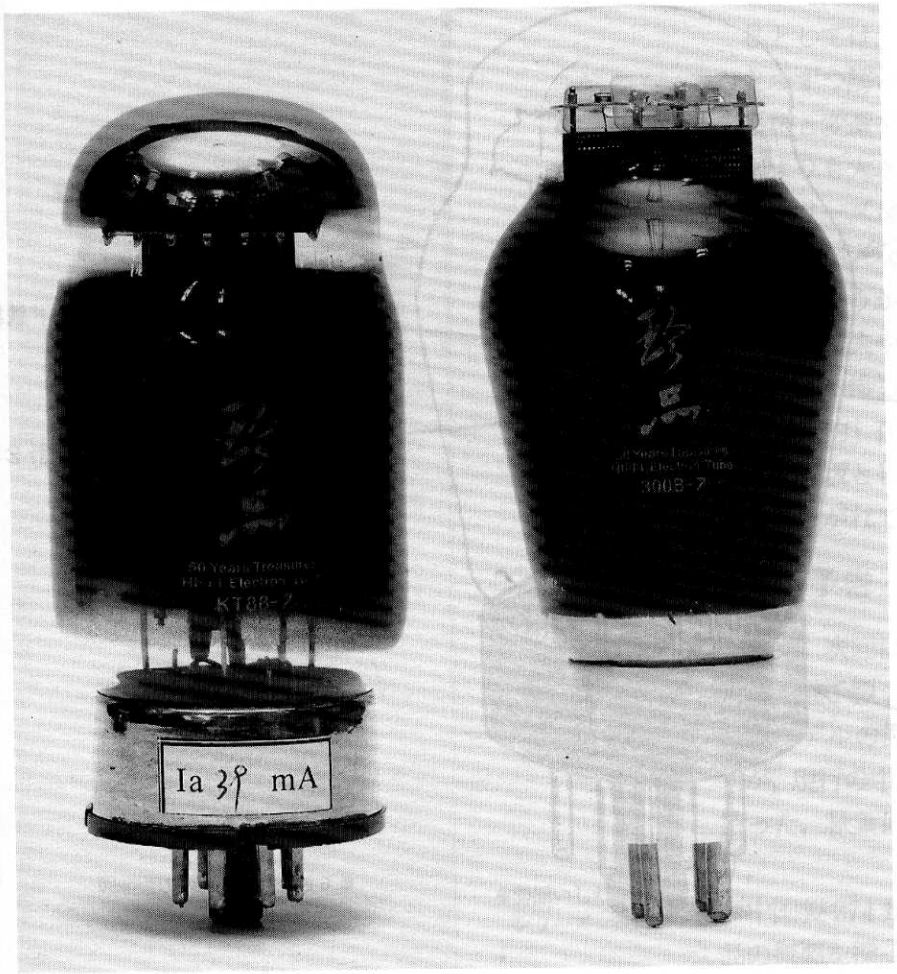
まず，点火直後は瑞々しさやパワフル感は一応伝わってくるものの，こなれ方がイマイチで，ややドンシャリで，彫りの浅い平面的な，音の芯がやや高域寄り（いわゆるハイ上がり）の，寝ぼけた感じの音です．

けれども，10分程経って完全にヒート・アップすると，音のグレードはぐっとアップします．なめらかさや伸びやかさが増して，こなれが良くなり，粒立ちも良くなって，音に厚みや深みが増してきます．透明感も深まって，ステレオ感やホール感・奥行き感，リアル感がアップし，音の芯が中域に移動してバランスも良好になります．響きや余韻も心地良さが増し，表現力も相当アップして，ヴィンテージ管のグレードにかなり近くなります．けれども，クリーミィ感はちょっと薄くて，どちらかと言うと米国製の6SN7GTに近い印象です．

他方，中国製6N8Pの原型である旧ソ連製の6H8C（=Sovtek-6SN7GT）は，クリアで，メリハリがあって，くっきりとしたシャープな音が特徴です．高域まですっとよく伸びていて，低域は締まっており，中域は充実していて，バランスは良好です．ステレオ感やホール感・奥行き感などもよく伝わってきて，細かな楽器のタッチまでよく聴こえて，表現力は上々です．

先程の6N8Pとは違って，点火直後から解像度が高くて粒立ちが良いのが特徴です．レンジ感が広くてダイナミックなその音は，温かみは感じるものの，どちらかと言うとやや寒色系で，硬質気味で輪郭がかっちりとした几帳面な印象です．

それに対して，旧ソ連製6H8Cのコピー版である中国製の6N8Pは，クリアで，メリハリがあって，粒立ちが良く，レンジ感も広いといった点は6H8Cと共通したものが感じられますが，響きや余韻は多目



◆珍品 KT 88-Z　　◆珍品 300 B-Z

型管の 6 L 6 GC-J（中国製 6 L 6 GC として有名な ST 管）はバルブの形状や寸法がオリジナル CV 181 に酷似しており，また，6 L 6 GC シリーズや 6 CA 7-Z のベースはオリジナル CV 181 に酷似しているので，これらの部材を流用すればオリジナルに酷似した外観の球を作ることが可能なはずだからです．

なお，バルブを変更すると現状よりもドーム部分が約 6 mm 上に移動するため，トップ・マイカの位置にずれが生じて管壁に接触しなくなりますが，これを解消するためには 4 本の支柱を少し長めにするか，あるいは現状のままでもステム・リードの曲げ具合やトップ・マイカの固定位置の変更といった微調整で可能なので，技術的にはそれほど難しい話ではないと思います．

言葉を幾つも並べ立てるよりもイメージをご覧いただくほうが判り易いと思いますので，改良版の想像図をイラストにしてみました．バルブを交換してベースの袴を短くするだけでかなり印象が変わってオリジナルの外観に近づくことがお判りいただけるかと思います．

繰り返しになりますが，CV 181-Z が限定モデルだとすると，中国製 6 N 8 P 系の ST 管版が途絶えてしまう可能性があるのですが，現代管の中で ST 管タイプの電圧増幅用双三極管は他に無いため，このまま消えてしまうのはとても惜しい気がします．

6 N 8 P の ST 管バージョンでも構わないので，バルブとベースを交換したルックス改良版が近い将来に登場することを期待して，ダメ押しで想像図も付けておきました（どこかの商社が特注してくれるとよいのですが……）．

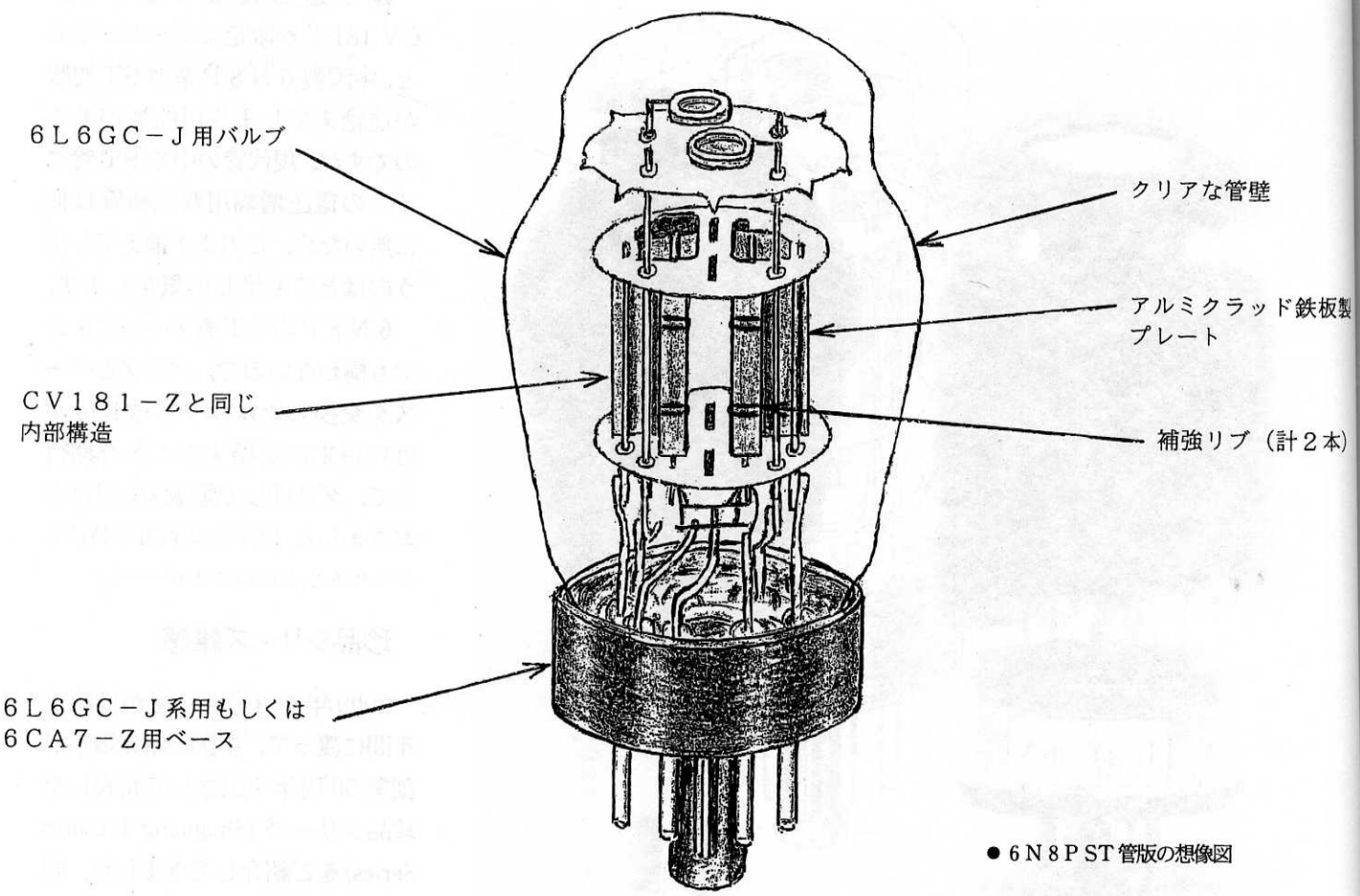
珍品シリーズ雑感

2009 年 6 月号から足かけ約 1 年間に渡って，中国の曙光電子が創業 50 周年を記念して発表した珍品シリーズ (Shuguang Tresures Series) をご紹介してきました．同シリーズには 6 CA 7-Z，KT 66-Z，KT 88-Z，300 B-Z，2 A 3-Z，CV 181-Z の全 6 種類がラインナップされています．

これらはいずれも同社製既存品種の発展形として企画・設計されたいわゆる改造球ですが，型番の末尾に付けられたアルファベットの最終文字である “Z” のサフィックスが示すとおり，これまでに培われてきた技術やノウハウの全てがつぎ込まれているようです．

例えば，プレートには元来はロケット・エンジンの部品や航空・産業用のタービン・ブレードに使われている単結晶状のニッケル系耐熱合金と思われる材料を 3 年の歳月をかけて真空管向きに仕上げた「超合金 (Super Alloy)」が採用され，管壁には内部雑音のもととなる電子流の乱れを低減させる効果があるとされる「高分子複合炭 (HPCC : High Polymer Compound Carbon) が塗布されるなどの新たな工夫の他，電極の組み立てや真空引き，エージングなどの各工程はこの道 30 年の熟練工によって気が配られており，品質管理も厳重に行われているようです．

余談になりますが，超合金の 3 文字に “Z” の 1 文字が加わると，かつて小学生時代の私を夢中にさせた無敵のスーパー・ロボット：マジンガー Z の装甲に使わ



● 6N8P ST管版の想像図

れた「超合金Z」という謎めいた素材をどうしても連想してしまいます（笑）.

個人的な試聴結果では，同シリーズ球はいずれも既存品種の基準管に比べて音質面のグレードが極めて高いことが確認でき，これまでに培われてきた技術やノウハウの集大成として誕生したことが納得できました.

また，青バルブのCV 181-Z (Type-1) を除いては，管壁に高分子複合炭 (HPCC) が塗布されているため，同シリーズ球は現代管としては珍しいカーボン・スート・タイプで，外観においてもまさに「珍品」的存在です.

特に6CA 7-ZやKT 88-Z, 300 B-Zはオリジナルには無い「黒球 (=Black-Bottle)」で，しかも6CA 7-Zは胴が一回り膨らんだドーム管と，その点においてもまさに「珍品」的存在ですが，このようなアレンジについては好き嫌いが分かれるかもしれません.

ちなみに直管の6CA 7までを胴回りを一段と太くして全種類をドーム管ないしST管に変更した理由は不明ですが，全種類ともHPCC処理された部分がドーム部分より下方なことから，管壁に高分子複合炭を塗布する際にスプレー・ガンのノズルの位置を調整するための治具を管頂部に挿入するためではないかと思われます.

販売価格はいずれも既存品種の基準管に比べて数倍も高いのが難点ですが，これは材料に特別な素材を採用していて，特別のラインで熟練工が注意深く入念に組み立てているなどの理由によって製造コストが高いため，致し方ないかと思います.

海外では幾つかの商社が取り扱っているようですが，我が国では秋葉原の一部の真空管販売店(アポロ電子)に今からちょうど1年前に少量入荷したものの，残念ながら現在はほとんど品切れ状態なのが惜しまれます（2月13日現在，6CA 7-ZとKT 88-Zだけは僅かに在庫が確認できました).

当初は珍品シリーズの紹介は半年（6回）程度で完結するだろうと考えていましたが，ルーツを探るうちにどんどん深みにはまっていって，気付いてみれば約1年も経ってしまいました．この間，入手困難な一風変わった「珍品」のレポートばかりを毎回読まされて食傷気味になられた方もおられるのではないかと思いますが，飽きもせずお付き合いいただきありがとうござ